

Bodhicitta の訳語と用語例

田 上 太 秀

一、漢訳仏典における bodhicitta の訳語例

(一) 多種の訳語例

(二) 翻訳者と訳語例

(三) 訳語の変遷と特色

二、初期大乘経典における bodhicitta の用語と類語例

(一) 『大宝積経迦葉品』

(二) 『金剛般若経』

(三) 『入法界品』・『十地品』

(四) 『八千頌般若』

(五) 『無量寿経』

(六) 『法華経』

(七) まとめ

一、漢訳仏典における bodhicitta の訳語例

菩提心に関する訳語例は、その原語とくらべて、多種多彩であることが両語を対照してみると分かる。たとえば bod-

hicitta の原語が漢訳文献では翻訳者によって種々に訳出されて、それも時代によって、翻訳の流行みtainなものがあったりして興味深い訳語の例を知ることができる。

ここで考察しようとするのは、原語と対照して訳語を検討するものではなく、実際に菩提心あるいはそれを表わす語と考えられる訳語を採録して、ある語はだれの初訳であるか、ある翻訳者はどの訳語を多用したのか、時代によって訳語の相違があるかなどを概観してみようとするものである。

(一) 多種の訳語例

翻訳者の多くに共通して用いられ、数人の翻訳者が好んで用いたと思われる訳語には、

菩提心・大菩提心・無上菩提心・阿耨多羅三藐三菩提心・発心

などがある。これらの訳語のほかにある翻訳者だけに顕著に見られる訳語がある。

(大)道意く支謙、竺法護

(大)道心く竺法護・羅什・竺仏念・闍那崛多

無上道心く羅什

無上正真道意く支謙・竺法護・竺仏念

無上正真(之)道心く竺法護

無上心く羅什

無上正等覺心く玄奘

これらもどちらかといえば、翻訳者たち全体に浸透した訳語であったといえる。

以上紹介したもののほかに、つぎのような多種の訳語例があり、主なものを列挙してみよう。

(1)阿耨多羅三耶三菩提

(2)阿耨多羅三耶三菩提心

(3)阿耨多羅三藐三菩提

(4)阿耨多羅三藐三菩提意

(6)無等等阿耨多羅三藐菩提心

不空訳『出生無辺門陀羅尼經』(大正蔵十九卷二三

一中)

(6)無上大菩提心 (隋・唐の漢訳に多い)

(7)無上正等菩提心

(8)無上正等菩提法心

菩提流志訳『一字仏頂輪王經』(大正蔵十九卷二三

二下)

(9)大菩提信心

菩提流支訳『勝思惟梵天所問經論』(大正蔵二六卷

三三九下)

(10)無上正真菩提道心

羅什訳『大樹緊那羅所問經』(大正蔵十五卷三七一上)

(11)無上正直道意

失訳『仏説薩羅国經』(大正蔵十四卷七九四上)

(12)無上三菩提心

仏陀跋陀羅訳『仏説觀仏三昧經』(大正蔵十五卷六

八二下)

(13)無上仏道意

慧覺等訳『賢愚經』(大正蔵四卷四二一中)

(14)無上平等道意

(15)無上平等度意

康僧会訳『旧雜譬喻經』(大正蔵四卷五二一上)

(16)宝心

竺法護訳『宝女所問經』(大正蔵十三卷四五八上)

(17)大乘無上之心

慧覺等訳『賢愚經』(大正蔵四卷四二一中)

(18)正覺心

(19)菩提意

(20) 大乘意

以上のものの中には文献では原典がないものなどがあり原語がなんであったかは不明だが、前後の文意からみて菩提心を述べるものであることを確かめて採録した。

(一) 翻訳者と訳語例

訳経史上に多数の翻訳者がいるが、その中で主な人をえらんで、菩提心関係の訳語がこれらにどんな特色として現われているかを表によって紹介しよう。

(注) ○印は使用頻度数の少ななるもの。

◎印はその中なるもの。

●印はその多なるもの。

翻訳者 訳語 例

安世高 ◎無上正真之道心

支婁迦讖 ○道意

○阿耨多羅三藐三菩提心

○阿耨多羅三耶三菩心

支謙 ●道意

●無上正真道意

◎阿耨多羅三藐三菩提心

菩提心

康僧鎧 無上正等覺之心・菩提心

竺法護 ●(大)道意

竺仏念

●(大)道心

無上正真道意

無上正真道心

●発心

◎菩提心

○阿耨多羅三藐三菩提心

宝心・清浄意・無上心・発意

●(大)道心

●無上正真之心

○発意

大道意・無上道心・発趣大乘・無上心・無上平

等道意(あるいは心)・無上菩提心・菩提心

●無上道心

●無上心

●阿耨多羅三藐三菩提心

●菩提心

◎(大)道心

◎発心

○(大)道意

○無上正真之道心

無上正真道意・清浄意、大乘意・無上菩提心、阿耨多羅三藐三菩心、阿耨多羅三藐三

鳩摩羅什

曇 無 識

菩提意

●菩提心

◎無上菩提心

◎発心

○阿耨多羅三藐三菩提心

○無上心

(大)道意・(大)道心・無上正真之心・無上

道心

菩 提 流 支

●阿耨多羅三藐三菩提心

●発心

●菩提心

無上菩提心、大菩提心

真 諦

●発心

●菩提心

闍 那 崛 多

●阿耨多羅三藐三菩提心

●発心

●菩提心

○(大)道意

○(大)道心

摩訶衍心、無上心、菩提意、無上菩提心

玄 奘

●無上正等覺心

●阿耨多羅三藐三菩提心

義 淨

●無上菩提心

●発心

◎大菩提心

◎菩提心

●無上菩提心

◎菩提心

○阿耨多羅三藐三菩提心

○大菩提心

○発心

無上正等覺心

施 護

●大菩提心

●阿耨多羅三藐三菩提心

●菩提心

大道意、無上大菩提心

法 護

●大菩提心

●阿耨多羅三藐三菩提心

●菩提心

◎発心

(大)道意、無上道心、無上正真道意、清淨心、無上心、無上正等覺心、正覺心、無上菩提心

以上の翻訳者以外の例も加えて、つぎに図表によって示すことにしよう。

発心	発意	無上菩提心	無上正等覺心	無上心	無上道心	無上正真(之)道心	無上正真道意	阿耨多羅三藐三菩提意	阿耨多羅三耶三菩提心	阿耨多羅三耶三菩心	阿耨多羅三藐三菩提心	大菩提心	菩提心	(大)道意	(大)道心	項目	翻譯者	年	代
						◎										高世安	後漢		
○									○	○				◎		識迦婁支	後漢		
				○		●			○	●			○	●		謙支	魏吳		
			○										◎			鎧僧康	魏吳		
●	○			○		●	●		◎	○	◎		◎	●	●	護法竺	晋西		
	◎	○		○		●							○		●	念仏竺	東		
◎		○		●	●	◎	○	○		○	●		●	◎	●	什羅摩鳩	晋		
●		●		◎	○		○				●		●		○	識無曇	晋		
◎		○		○	○						◎		◎		○	羅陀跋陀仏	劉宋		
◎				○					○	◎			◎		○	摩跋那求	劉宋		
○				○	◎		○			●		●	○			羅陀跋那求	梁		
●		○								●	◎	●				支流提菩	梁		
●												●				諦真	陳隋		
●		●		○			○			●		●	◎	●		多崛那闍	陳隋		
●		●	●							●	●	●		○		奘玄	唐		
●		○								○	◎	◎				陀難又実	唐		
◎		●	○							◎	◎	●				浄義	唐		
●		○								●		●				志流提菩	唐		
○											○	◎				畏無善	唐		
○										○	◎	●				智剛金	唐		
●		●	○							●	●	●		○		空不	唐		
○		◎	○							◎	◎	●				若般	唐		
◎										●	●	●	○			護施	宋		
										○	◎	◎	○			賢法	宋		
●		○	○	○		○				●	●	●	○			護法	宋		

(三) 訳語の変遷と特色

(イ) 道意、道心、菩提心など

原語の *bodhicitta* の訳語として考えられるものに道意、道心、菩提心そして大菩提心などが挙げられる。前掲の図表によって分かるように、これら四種の訳語のなかでは、道意の訳が古く、支婁迦識訳である。これは、

『仏開解梵志阿毘曇經』大正蔵一卷二六二中など

『般若三昧經』大正蔵十三卷九〇九上、九一三中など

などにみられる。支謙もこの訳語を多用したらしい。竺法護も好んで用いたようである。この訳語は竺法護以後では羅什や闍那崛多などがかなり用いたぐらいで、あまり人氣がなかったといえよう。ただ宋代の翻訳者たちに用いられているのが面白い。

道心の訳語は竺法護の訳が最初であるようだ。この訳語は闍那崛多あたりまで用いられ、その後は省られなくなったようである。

菩提心の訳語はどの翻訳者も用い、全年代に通じて多用されたが、初訳は支謙訳の

『菩薩本緣経』大正蔵三卷六八中

においてであり、一度だけ用いられている。このあと、康僧鎧訳の

『仏説無量寿経』大正蔵十二卷二六八上・二七二中などにみられる。菩提心の訳語が定着しだしたのは、羅什のころからであろう。

大菩提心の初訳は菩提流支訳をもってするものといえ、唐の玄奘が多用するに至って、宋の時代には盛んに用いられたいらしい。とくに密教系經典・論書において多出する訳語である。

(ロ) 無上正真道意(心)、阿耨多羅三藐三菩提心、無上正等

覚心など

これらの訳語は前掲の図表でみたように多彩である。原語としては、*anuttarāyām samyak sambodhau cittam (utpādayati)* という形が一般に考えられ、これを音写訳したものの、意識したもの、直訳したものなど種々である。

つぎに主なものをあげて特色を考えてみよう。

この類例の中で、最古の訳語例は安世高訳の無上正真道心と、支婁迦識訳の阿耨多羅三藐三菩提心・阿耨多羅三耶三菩提(提)心などである。安世高訳は、

『仏説捺女祇域因緣経』大正蔵十四卷九〇一中

(異訳本) 『仏説奈女耆婆経』大正蔵十四卷九〇五下

にある。支婁迦識訳は、

。阿耨多羅三藐三菩提心

『佉真陀羅所問如來三昧經』大正藏十五卷三五二上・三五四下・三五五中・三五九中

『阿闍世王經』大正藏十五卷三九一下

阿耨多羅三耶三菩提心

『佉真陀羅所問如來三昧經』大正藏十五卷三五一中・三六〇下など

六〇下など

『仏説慧印三昧經』大正藏十五卷四六三上

阿耨多羅三耶三菩提心

『阿闍世王經』大正藏十五卷三九四中以下

などにみられる。

ところでさきに表記したように無上正真之道心（あるいは―道意）は、支謙・竺法護・竺仏念などに多用されているのが特色であり、どちらかといえば古訳に属する訳語といえる。羅什や曇無讖にも用いられたようだが、その後、宋の法護あたりにもみられるまですたれた訳語といえそうである。無上道心の訳語は羅什が好んで用いたぐらいで、古くは支謙から下限は求那跋摩までで以後はすたれた。これも古訳旧訳に属する訳語である。

新訳といわれる無上正等覺心は玄奘初訳とされるが、じつは古くに康僧鎧訳「無上正等覺之心」が

『仏説無量壽經』大正藏十二卷二六七中

にみられる。このあと玄奘までの翻訳者にはこの訳語はみら

れないようである。玄奘以後には数人のものに用いられただけで訳語としては定着しなかったといえる。

無上菩提心の初訳は竺仏念であるが、これは無上正真道心（意）、無上道心などに代わって新訳時代に多用された訳語で、唐代には定着した訳語になったと考えられる。

音写語の阿耨多羅三藐三菩提心は古くから定訳となっていた。古くは支婁迦讖訳があり多用されている。羅什あたりから重用されたといえ、訳語史の上では菩提心と並んで一つの定訳となっていることが分かる。これに類同する阿耨多羅三耶三菩提心、阿耨多羅三耶三菩提心・阿耨多羅三藐三菩提意などの訳語は、新訳時代にはすたれて省られていない。

(ハ) 発心、発意

発意の訳語は、今日あまり見聞することはないが、竺法護が初訳である。竺仏会が多用した訳語である。この訳語を主な翻訳者に求めてみたが、これら二人のほかには見当らないようである。これは好まれなかったといえる。

発心は、古くは支婁迦讖訳にあり、

『仏説佉真陀羅所問如來三昧經』大正藏十五卷三五〇下・三五六中・三六二上

にその例をみる。竺法護が多用し、それ以後ではとくに菩提流支以降、発意に代わって好んで用いられた訳語である、こ

れも通じて定訳となったものである。

二、初期大乘經典における菩提心の用語と類例

最初期の大乗經典の成立年代については、多くの学者により研究されており、多くの研究論文、著書が発表されている。⁽¹⁾ 最古の大乗經典がなにかについても研究がなされているが、いまここで問題考察のために必要とするものは原典のある經典である。漢訳にみる菩提心の訳語例をみた前章について、原語としてはどのような表現がなされていたのか、これについて考察しようとするものである。

最初期成立の大乗經典と考えられ、しかも原典が現存するものとしては、『金剛般若経』⁽²⁾、『大宝積経迦葉品』⁽³⁾、『八千頌般若経』⁽⁴⁾、『無量寿経』⁽⁵⁾、『法華経』⁽⁶⁾、『十地経』⁽⁷⁾、『入法界品』⁽⁸⁾などである。これらの經典中に菩薩の菩提心をどのように表現しているのか、諸種の例を經典ごとに抽出して、その特色を考えてみよう。

(一) 『迦葉品』

大乘經典中、最古經典の一つとされる *Kāśyapaparivarta*⁽⁹⁾ に菩提心の例をみると、ここにはかなり *bodhicitta* の用語が多用され、しかもそれは、重要な術語として用いられていることが分かる。この經典の作者にはすでに *bodhicitta* の語は、

大乘仏教用語として定着したものであったと考えられる。用例をあげてみよう。

◦ *bodhisattvasya bodhicittaṃ muhyati* (p. 6)

◦ *sarvasu jātsu jātamātrasya bodhicittam āmukhi-bhavati* (p. 8)

◦ *bodhicittasyānutsargah* (p. 39)

◦ *sarvasatveṣu bodhicittārocanatā* (p. 43)

◦ *bodhicittaparikarmatayā* (p. 49)

◦ *bodhicittapūrvanṅamatā* (p. 50)

◦ *bodhicitta kuśalamūla pratiṣṭhita-bodhisattvasya* (p. 70)

などのそれぞれの例の表現から考えると、*bodhicitta* がいかにも新造語であるかのように思われ、それを重要関心事として強調しているところが伺われる。用例を見て分かるように、いわゆる、定型的表現の *bodhicittotpādayate* がなく、*bodhicitta* を独立した語として用い、内容的には特殊な意味をもたせてはいないが、菩薩を特徴づける心として見ている。新造語として取り扱っているようにもうけとれる。

この用語のほかに *prathamacitta* の用語もみられる。この用語の場合は、

prathamacittotpādiko bodhisattvah..... (p. 56. 76. 125. 126)

の定型的表現ででてくる。この型式は *Mahāvastu* や、般若

経の中にも見られる定型的表現である。支婁迦讖訳では「初発意菩薩」となっており、後代の異訳では「初発心菩薩」となっている。いずれにしても bodhicitta の意味で訳していることは、前後の文からうかがえる。

また

mahāyāna samprasthītānām……satvānām…(p. 169, 225)

という表現がみられる。これは、yāna 自体に大乘的解釈がこめられているわけで、大乘宣揚の意味から mahāyāna へ心を発起することを表現したものである。

全体の内容と語例から判断すると、bodhicitta の用語は新造語ではあるが、ある程度、定着した語であったことが伺える。まづ注意しておくべきことは、bodhicitta が原典では定着した用語であったと考えられるのに対して、漢訳した支婁迦讖は『遺日摩尼宝経』では、相当する個所の訳語として、菩薩道・菩薩心を当てたり、あるいは、欠訳していたりなどしている。つまり後世の定訳となった「菩提心」の訳語がこの訳本ではみあたらないのである。ただかれの訳本『菩薩本縁経』では一度だけ「発菩提心」(大正蔵三卷六八中)と訳したものがあがるが、全体として翻訳者支婁迦讖には、bodhicitta がなにを意味するのかが充分に理解されていなかったのではないか。かれには、bodhicitta は bodhisattvayāna の略語形として考えていたのであろうか。

(一) 『金剛般若経』

この經典には、周知のように空思想を説きながらも、空 sunyata の語を用いていない。また菩薩行を説いていながらその中心となる bodhicitta の語を用いていないのも特色である。ただ、bodhicitta の語に代わる表現がみられる。それは、
bodhisattvayāna (-samprasthāna)

である。これは經典中には四ヶ処 (p. 28, 46, 47<2回>) に出ており、形式は同じである。これを翻訳者たちは、つぎのように訳出した。

鳩摩羅什・発阿耨多羅三藐三菩提心 (大正蔵八卷七四八下) ・七五一上ほか)

菩提流支・ ” (大正蔵八卷七五二下) ・七五五上ほか)

真諦・行菩薩乘 (大正蔵八卷七六二上・七六四下ほか)

達摩笈多・菩薩乘發行 (大正蔵八卷七六七上・七六九下ほか) 　　か)

玄奘・発趣菩薩乘 (大正蔵七卷九八〇上・九八三下ほか)

義浄・ ” (大正蔵八卷七七二上・七七四上ほか)

羅什と流支が意訳したといえ、あとは菩薩乘の訳は一定している。羅什と流支が bodhisattvayāna をいわゆるの「菩提心」と理解していたことが知られる。

このほかに

agra-yāna-samprasthitānām sattvānām arthāya śreṣṭha-yāna-samprasthitānām arthāya (p. 39, 43)

の例がみられる。これは、*bodhisattvayāna* と代替したもので、*agra-yāna=śreṣṭha-yāna=bodhisattvayāna* であることを意味する。すべて、*yāna* を中心に表現されている点が特色である。これは大乘 (*mahāyāna*) がなんであるのか、そして、切に希求されるべきものであることを示す表現である。

これにより初期大乘経典には、*bodhicitta* の用語を用いなくて、その精神であるところを示す表現 *yāna* をもって、菩薩の求道心を説示したものがあつたことを知るのである。

(三) 『入法界品』・『十地品』

古い大乘経典の一つ *Gaṇḍavyūha* では、*bodhicitta* の語は定着した用語であつたと考えられる。ここでは、*bodhicittotpādah* の定型がみられる。例をあげると

bodhicittotpādo bodhisattvānām janmabhūmir bodhisattvakule janakā (p. 525)

kathaṃ bodhisattvasya bodhicittotpādo na pranaśyati sarvabhavagatiṣu (p. 73) cf. p. 18.

などがあるが、この用例は数多くない。漢訳における「発菩提心」の原語句が成立していたことが分かる。

一方、*Daśabhūmikā-sūtra* では、この形式の表現はなく、類似する例語としては、*cittotpādena* (ラードル本十一頁)があるだけである。ところがこの経典には *bodhicitta* として独立した術語で多出するのが指摘される。それもこの語そのものにか特別な意味をもたせて用いているむきも考えられる。それは、「菩提心が生ずる」(……*bodhicittaṃ jāyate*) という表現が偈の部分で多出する。(近藤本、二〇八頁、二、四、五、六、八の各偈。二〇九頁、七、八、九の各偈。二一〇頁、一〇、十一、十二、十三の各偈)。このほかには、「菩提心を生起する」という表現が一個所(近藤本、二一八頁、七偈)に見られるだけである。

「菩提心が生起する」という言い方は、菩提心自体に一つの覚体としての意味をもたせたように判断される。

『十地経』には、*bodhicitta* の用語だけで、次に紹介するような『入法界品』の用例は見当らない。

- *anuttarām samyak sambodhau samprasthite* (p. 143)
- *anuttarām abhisamprasthitāḥ* (p. 492)
- *anuttarāyām samyak sambodhau praṇidadhanti* (p. 492)
- *bodhāya cittam utpādyate* (p. 63) < *Daś. bhū.* (R本、p. 11) >

◦ *bodhāya praṇidadhāti* (p. 122)
 などは、*bodhicittotpādah* の説明的表現として記述されてお

り、これらの表現が簡単にそして一語でもって表現したものが *bodhicittotpādaḥ* であったと考えられる。また『入法界品』の内容は善財童子の求道遍歴を述べたもので、それ自体菩提心の説明である。作者は、*bodhicitta* の用語を適所に用いている。ともかくも、『入法界品』『十地経』の両経では、*bodhicitta* の用語は定着したものであったといえよう。

(四) 『八千頌般若』

Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā では、最初の部分に般若波羅蜜行を述べたあとで、*bodhicitta* の用語が突然に出てくる。そしてこれに類似する表現も用語も、それ以前の部分にはない。このあとに、さらに心は心に非ず、その心の本性は輝いているからであるという有名な説述の個所が続いている。また、この個所で菩薩が *māhasattva* である理由を述べる中で、種々の心と共に菩提心をあげている。⁽¹⁰⁾ さらにこれらのほかに *bodhicitta* の用語は多出する。⁽¹¹⁾

これらの用例から『八千頌般若』の作者は、*bodhicitta* の用語を十分に熟知し、使いなれた用語であったと考えられる。とくに五種心を菩薩摩訶薩の心内容として述べているところに *bodhicitta* が含まれていることは、この語が菩薩の重要な心であったことを示すものである。しかもこの語を空思想と心性本清浄説とによって説明していることは、かなりこの語

が定着したものであったことが知られる。

この用語のほかに *prathamacitta* の用語も数例ある (p. 190, 368, 352, etc.)。この中に *prathamam bodhicittam* の用例がみられる (p. 190)。その個所の文ではこれが「最初の菩提心」といって *bodhicitta* を想うことは執着であり、著想であると述べている。*prathamacitta* が *prathamam bodhicittam* と分離して使われている例はほかにみられないが、後者は前者の具体的意味を示した用例であると考えられる。

この用例から即断はできないかもしれないが、おそらく *Mahāvastu* に定着し多用されている *prathamacitta* を『八千頌般若』の作者が、このように *bodhi* を挿入して表現したものであろう。そしてこの *prathama* が脱落して *bodhicitta* の語が独立したのではないだろうか。つまり、
prathamacitta → *prathama-bodhicitta* → *bodhicitta*
という経過を辿ってきたものと考えられる。

このほかに *prathamacitta* の用語は、
prathama-cittotpāda-kusala-mūlam avaropitam anuttarā-yāṃ samyak sambodhau…… (p. 368)

の例がみられる。これも菩提心と同義に用いられていることが分かる。Conze はかれの著書『般若経索引』でこの *prathamacitta* を *the thought of enlightenment* と英訳し、⁽¹²⁾ 菩提心の意味に解釈している。

以上、*bodhicitta* と *prathamacitta* の用例を紹介したが、これらの用例の相当漢訳を支婁迦識訳『道行経』で探してみたが、「菩提心」と訳出したものは一つも見当らない。また羅什訳『小品』においても同様である。つぎにこの対照表を示すと、

『仏母』 〈大正 8 巻〉	『小品』 〈大正 8 巻〉	『道行経』 〈大正 8 巻〉	『八千頌』
心 (587b)	菩薩心 (537b)	なし	p. 5
菩薩心 (589c)	心 (537c)	菩薩心 (427a)	19
〃 (596b)	阿耨多羅三藐三菩提心 (542c)	なし	61
〃 (603c)	〃 (544c)	なし	104
阿耨多羅三藐三菩提心 (607c)	〃 (547c)	仏道 (438a)	134
菩提心 (607c)	初発意 (547c)	なし	134
〃 (661c)	是心 (552a)	心	190 (prathamacitta)

この表からみても *bodhicitta* は施護訳は別にして、支婁迦識・羅什の訳では、意識されていることが分かる。とくに支婁迦識にあっては、*bodhicitta* が *bodhisattva-citta* の意味であったと考えられ、また羅什訳でも最初の部分では「菩薩心」と訳しているところから、かれもこれが *bodhisattvacitta* と考えていたのだろう。かれにとってもまだ定訳をもたなかったことが表によって知られる。これは、先きの漢訳語の表によっても分かるように菩提心の訳語は、古訳にあっては充分定着していなかったことが知られる。

(五) 『無量寿経』

Sukhāvativyūha においては、*bodhicitta* の用語は第十八願の誓願文の中に一回 (p. 18) 出ているだけでほかには見当らない。この經典の作者には、*bodhicitta* の用語が定着していなかったといえる。ただ、この語自身が意味する無上のさとりを求める心という意味での *anuttarāyaṅ samyak-sambodhuḥ cittaṃ* (or *cittāny*)……は、その表現の例はいくつか指摘できる。また *bodhāya cittaṃ* (*utpādyā*……) (p. 60) の例もある。いずれの用例も他の經典にみられるものでとくに特色あるものではない。そして、これらの用例は經典全体からすれば数例でしかない。

この經典の特色は浄土へ往生することが救いであると説述

するとところから、単なる仏の無上のさとりを求める心というだけでは意を尽せないところもあり、そこで経典の特色を示す表現が関連用例として抽出されるべきであろう。ここには仏国土に生れたいという具体的表現として現われる。つまり極楽浄土に往生したい心が菩提心に当るわけである。したがって菩提心だけの用語では、この意味は表現しにくいのである。そこでこの経典作者は菩提心 (bodhicitta) の用語を多用しなかったのではないだろうか。

仏国土に往生したい心を生起する、という類例をいくつかあげてみよう。

◦ tatra buddhaksetre cittam preṣayeyur.... (p. 14. 第19願)

◦ sprhāms ca tasmīn buddhaksetre utpādayisyanti (p. 43.

2回出づ)

◦ buddhaksetre cittam sampreṣayisyanti (p. 42)

◦ anuttarāyaṃ samyak sambodhau cittam utpādyaḍhyā-
śayapatitayā samitayā tasmīn buddhaksetre cittam
sampsreṣyopapataye kuśalamūlāni ca pariṇāmayitavyā-
ni. (p. 42) ^ 阿弥陀如来をどうすれば見ることができ
かと望んだときに√無上のさとりを求めて発心し、堅い
信心に支えられた心境界により、かの仏国土に(生れる
ことに)心を専注し、善根を成熟させなければならぬ。

Bodhicitta の訳語と用語例 (田上)

仏国に往生したい心がそのまま bodhicitta の意味であることは、最後の例をもってしても理解できる。しかし、これらのいくつかの用例をもって願往生心が bodhicitta と同義と理解しようと考えられるとしても、それらが bodhicitta の代わり多用されたという理由づけにはならないだろう。というのは、もしそうであるとすれば、bodhicitta に代わるべき術語が用いられて然るべきであろう。たとえば、buddhaksetra-citta というような用語が考えられるべきである。経典全体には決定的表現をもつ術語はなく、関連する箇所は文で示されている。前述したように bodhicitta の用語自体、一回しか用いられていなく、これも十分にこなしていない感じである。新造語としての bodhicitta を使ってみたいという程度のものであったと推測される。

(六) 『法華経』

Saddharmapuṇḍarīka-sūtra においても bodhicitta の用語は定着していなかったといえる。この用語の例は第五章第七七偈(一二〇頁)と、第十一章(二二五頁)との二箇所各々一回ずつあるだけで、ほかにはみあたらないようである。しかも前者の個所に相当する漢訳はなく、後者の漢訳では、『妙品』では「菩提心」(大正蔵九卷三五頁中)、『正品』では「無上正真道」(大正蔵九卷一〇六上)となっている。周知の

ように前者は羅什訳、後者は竺法護訳である。注目すべきことは、いままで紹介した經典中、かれの翻訳したものは「菩提心」と訳したものがなかったのに、ここではわずか一度だけ「菩提心」と訳しているのである。

この bodhicitta が出てくる個所はいわゆる原始法華経とされる部分であるが、本経の原始部分の中で類例を探ってみると多彩な表現があることに気付く。たとえば『金剛般若経』にみる bodhisattvayāna-samprasthitāḥ (p. 347, 361, 356)⁽¹⁴⁾ があり、また nava-yāna-samprasthitāḥ (p. 30, G. 14, p. 191)⁽¹⁵⁾ ekasmi yāna paripacayanti (p. 46, G. 73) の用例もみられる。いずれも yāna を中心にした例をあげたが、新宗教運動の大乗仏教の特色を如実に示すものである。これら bodhisattvayāna (菩薩乘) nava-yāna (新しい乗物) eka-yāna (一乗) のうち、後の二つの中には、bodhicitta と結びつけて述べたものはない。

anuttara-samyaksambodhi を求める心を生起するといふ表現もかなりみられ、⁽¹⁵⁾ 使い慣れたものようである。

本経でみる前掲の多くの表現は、bodhicitta の用語がおそらく現われる以前のものであろう。つまり、bodhāya cittam utpādayati というような定型的表現でなく、citta がなく、しかも utpādayati に代わる種々の表現を用いているのが特色である。たとえば、

janati (p. 8, G. 13) praiṣṭhāti (p. 27, G. 99) prārthayati (p. 68, G. 38) sprhayati (p. 120, G. 30) gavesāte (p. 193, G. 9) ghatate (p. 226) arhate (p. 252, G. 70) samanvāharasati (p. 283, G. 16) などである。

ここには多彩な心情の表現がみられる。定型的表現では言い尽せないものを種々の動詞に託していることが伺える。

bodhi ṅ agra ṅ iva agrabodhi (p. 9, 11, 35, 58, 122, 194, 250, 331, etc) の用語はあるが、agra-bodhicitta の用語はない。

以上の用例でみるように求道の心情は一つの bodhicitta という用語で表現される以前の、いまだこの語が定着していないところで用いられたものばかりである。要するに本経では、bodhicitta は、定着した意味をもって用いられなかったと考えられる。

(七) まとめ

以上、初期大乘經典中、古い成立と考えられる經典で原典のあるものを数典をえらんで bodhicitta の用語とその類例をあげて考察した結果、(1) bodhicitta の用語が定着しているものと、(2) 用語はあるが定着していないものと、(3) まったくその用語をみないものがあることに気付く。

(イ)に該当する經典として

the Kāśyapaparivarta

the Gaṇḍavyūha

the Daśabhūmikā-sūtra

the Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā

(ロ)に該当する經典として

the Sūkhāvativyūha

the Saddharmapuṇḍarīka-sūtra

(ハ)に該当する經典として

the Vajracchedikā-prajñāpāramitā-sūtra

就中、(ロ)に該当する經典では『無量寿経』では一回、『法華経』では二回というように bodhicitta の用例はきわめて少く、ないに等しいことを考えると、全体的に、bodhicitta を多用し定着して、そしてなんらかの意味づけをしようとした經典群と、bodhicitta の新語に馴じめずに、その代りにそれを意味する別の表現で菩薩の求道の心情を表現した經典群との二つのグループに分けて考えることもできよう。あるいは bodhicitta の新語がいまだ修行僧の人口に膾炙されるに至らなかった、つまり大乘仏教の一つの重要な術語となる以前の状態であったのが(ロ)(ハ)の經典群にみる用例かとも考えられる。(イ)の經典群中、『迦葉品』以外の三つの經典はかなり、bodhicitta を使い慣れていたと考えられる。その三經典中でも『十

地経』は bodhicitta になにか本覚心を予想するような意味を付している感さえする。また『八千頌般若』ではすでに述べたように空思想と関係づけて説明されるようになり、心性本清浄説の上に立って bodhicitta を説明している。これらのことからすれば、『十地経』『八千頌般若』では大乘仏教の術語として充分に bodhicitta は定着していたと考えられる。

つぎに prathamacitta の用例は『迦葉品』『八千頌般若』の二つにみられ、とくに後者では既述のように prathamam bodhicittam の用例がみられた。これは prathamacitta から bodhicitta へ変化する過程の残影が示されていると推測される。Mahāvastu の prathamacitta が誓願思想の上に立って用いられているところから、これが上求菩提下化衆生の二利行を表わす心情であったのを、そのまま大乘教徒は借用しているのである。そして『八千頌般若』の作者は、prathamam bodhicittam の形も残している。おそらく bodhicitta は anuttara-samyaksamdodhi-citta の短縮形ではなく、prathamacitta から変化した大乘教徒の新造語であったと考えられる。なぜならば、anuttara-samyaksambodhi-citta の短縮形であったとすれば、この長い熟語の形が經典中にあるはずであるのに、実際にはこのような合成語ではなく、一例をあげると anuttarāyaṃ samyaksambodhau cittam utpādayati という格を有した文章で表現されているからである。また短縮形と

して bodhicitta を用いているのであれば、このような長い文章表現はあちこちで用いないで済んだはずである。この長い文章表現は原始經典以来の仏伝文学にみられる本生菩薩の求道心情の表現文であり、それが凡夫にも仏のさとりがえられるとする大乘仏教の思想を宣伝するために、凡夫・菩薩が求道する心情表現に用い、本生菩薩の定型的求道心情の表現を借りて記述したものに過ぎない。これが即座に bodhicitta という一つの短い単語に変化し慣用されるに至ったとは考えられない。とくに『迦葉品』『八千頌般若』などでは、bodhicitta の原型は prathama-citta であったと考える方が妥当ではないか。

また bodhāya cittam utpādayati やこれに類するものからの変化も考えられる。すなわち、bodhi 自体が anuttara-samyaksambodhi の略形と考えられるので、bodhicitta への変化が近いように思われるが、考えられないこともない。つまり、このような表現が多出する『法華経』や『無量寿経』などでは、prathamacitta の用例が見当たらないので、bodhicitta はさきの短縮形としてできたとも考えられよう。

bodhicitta の用語の形成がどのような経過を辿ったかはいまだ定かではないが、ともかく、この用語は新造語であることは確かであり、そして、これが大乘經典の古層のもののかくつかにおいてすでに定着していたことは否定できない。し

かしなかには、いまだこれが重要術語として扱われていない經典があったことも知られるのである。

また、漢訳では古訳時代には bodhicitta は bodhisattavacitta の略語形と考えられていたふしもみられ、これが菩薩心の訳から菩提心の定訳になるには旧訳にはいつてからである。あるいは、bodhicitta は漢訳者たちが考えたように、bodhisattvacitta の略語形であったのかも知れない。

(1) 主なものをあげると、

椎尾弁匡『仏教經典概説』昭和八年、赤沼智善『仏教經典史論』昭和十四年、望月信享『仏教經典成立史論』昭和二十年、宇井伯寿『仏教經典史』昭和三二年、平川彰『初期大乘仏教の研究』昭和四三年。

H. Nakamura: A Survey of Mahāyāna Buddhism with Bibliographical Notes. Part I. (the Journal of Intercultural Studies, Number 3. 1976.)

(2) この經典は、紀元後一五〇〜二〇〇年の間に成立したものである。(中村元『般若心経・金剛般若経』(岩波文庫) 解題 一九五〜二〇〇頁参照せよ。

原典は E. Conze: Vajracchedikā Prajñāpāramitā. ed and tr. with introduction and glossary. Serie Orientale Roma. XIII Roma. Is. M. E. O. 1957 を参照した。

(3) この經典は、竜樹の時代にはすでに存在していたといわれる。

原典は、鋼和泰著『大宝積経迦葉品梵藏漢六種合刊』(南務印

書館刊)を参照した。

- (4) この経典は、支婁迦讖により光和二年(一七九)に訳出された『出三藏記集』に記録されているので、それより以前に現在の形をみたとして、紀元後一〇〇年ごろには月支国に存在したと考えることができるようである。(平川彰『初期大乘仏教の研究』一〇四頁参照せよ。)

原典は、U. Wogihara: *Abhisamayālaṅkāra-lōkā prajñāpāramitā vyākhyā. The Toyo Bunko, 1973.* を参照した。

- (5) この経典は紀元後二〇〇年以前に成立したことは、うたがえないが、クシャーナ王朝時代に紀元後一〜二世紀ごろ、化地の部教団において作成されたと推定する説や、紀元後一四〇年ごろあるいは、それより少し以前の成立とする説もある。いずれにしても紀元後の初期に成立したことが考えられている。

① 宇井伯寿「経典の成立とその伝統」(『仏教布教大系』第二卷・七六頁)

② 春日井真也「原始無量寿経思想型態推定への課題」(『仏教文化研究』二・四五頁)

③ 中村元「浄土三部経の解説」(岩波文庫『浄土三部経』下・二〇六頁)

原典は、A. Ashikaga: *Sukhāvativyūha. Hōzōkan. Kyoto. 1965*

- (6) 『法華経』の成立に関しては、諸種の説があるが、現存法華経(二七品)は紀元後一五〇年にはすでに成立していたが、なかでも原始法華経の成立、つまり最初の二二品は、紀元後一〇〇年以前にすでに成立していたとする説が一般的である。

Bodhicitta の訳語と用語例 (田上)

た、嘱累品第二二品までの部分は、紀元後四〇〜二二〇年の間に成立したらしいという説もある。

① 布施浩岳『法華経成立史』二六三頁

② 宇井伯寿・前掲書六七頁、松本文三郎『仏典の研究』再版一九六頁以下

③ 中村元「大乘経典の成立時代」(宮本正尊編『大乘仏教の成立史的研究』四八八頁)

原典は、H. Kern and B. Nanjio: *Saddharmapuṇḍarīka, st. Pétersbourg. 1908-1912.* を参照した。

- (7) この経典は紀元後五〇〜一五〇年の間に成立したという説がある。(竜山章真訳註『梵文和訳十地経』Introduction 七頁) 原典は、J. Rahder: *Daśabhūmikāsūtra et Bodhisattvabhūmi. Louvain 1926, Daśabhūmiśvaro nāma Mahāyānasūtram, revised and edited by R. Kondō, Tokyo. 1936.* を参照した。

(8) この経典はクシャーナ王朝の初期、すなわち紀元後一〜一〇〇年の間に成立したらしい。(中村元「華嚴経の思想史的意義」(川田・中村編『華嚴思想』九〇〜九三頁)

原典は、D. T. Suzuki: *the Gaṇḍavyūha-sūtra, Kyoto 1949.* を参照した。

- (9) *punar aparāṃ Bhagavan Bodhisattvena Mahāsattvena prajñāpāramitāyāṃ caratā bhavayatā, evaṃ sikṣitavyaṃ yathā 'sau sikṣyamāṇas tenāpi bodhicittena na manyeta. Tathā hi tac cittam acittam prakṛiś cittasya prabhāsarā.* (p. 5)

(10) *bodhicitta, sarvajñatā-citta, anāśravaṃ cittam, asaṃaṃ*

cittam, asamasaṃ cittaṃ, (p.19)

(11) p. 61, 104, 134 (2回), 190 (2回) etc.

(12) E. Conze: Material for A Dictionary of the Prajñāpāramitā Literature, p.281, “prathama-cittotpādam upādāya”の項を参照せよ。ここには『八千頌般若』の用例は一つしかあげないが、多くは『二万五千頌般若』の用例である。

(13) anutarāyāḥ samyak sambodheś cittaṃ utpādya... (p. 8) cf. p. 13, 42, 66.

(14) これは第二三本作品では多出する。原始部分以外では多用ゆえに省略。

(15) VII-p. 161, 163, IX-p. 191, XI-p. 220, 223, etc.